

絶えず別様の仕方

—荒川修作と創造する環境—

文学部 稲垣 諭

「別様の仕方で存在すること」としての「可能性」

可能性という語にはいつでも魅惑的な意味がまわりついている。それは、ある事実が確定されたさいに、それとは異なる現実もありえたと述べる時の「～うる」や「～える」といった可能世界的な様相論理にかかわる一方で、特定された事態とは異なり、いまだ実現されていない新たな局面を指示するための経験や行為の潜在的な選択肢にもかかわる。しばしば人間の脳の90%以上は活用されておらず、そこには多くの可能性が秘められていると声高に叫ばれることがある。こうした言明における可能性という語は、人間の特質が、現在理解されている知の範囲に限定されることなく、いつでも別様でありうるというように人間の未来と特権性の確保を誘導するものとして用いられている。ただしここでは、「別様でありうること」に含まれる「別様さ」の内実と選択肢の吟味および、現にある状況から逸脱し、超え出て行くための自由度の範囲については明示されず、素通りされてしまうことがほとんどである。可能性という語は、人間が運命や決定論から逃れるための自由への架け橋のひとつであるが、この可能性を含み込んだ自由にはどんな条件も制約もない訳ではない。

思考と物質が全く異なるものであることは、デカルト以来の哲学の長きにわたる自明な前提となっている。そして一方には自由、そして他方に必然を割り振る哲学的議論がその延長上に構想されてきた。確かに思考を媒介した論理的可能性は、論理規則に反しない限り、いつでも別様に考えることもできるといった思考内部での想像力の豊かさと、人間精神の自由を示唆している。そしてこの論理規則と想像力を駆使しながら、「別様の仕方では存在しえないもの」、つまり普遍妥当的なものを、思考を通じて見極めるのが、アリストテレス以来の哲学の伝統であり、最重要課題であり続けてきた。とはいえ「思考の中の必然性」から、「思考を通じた世界の必然性」への移行は、そう単純なものではない。世界が今ある姿で成立していることの必然性は、どのようにすればそれを論じたことになるのか。例えば人間の指が5本であるのは必然的なのか、あるいは肉食の馬が存在しないのは必然的なのであろうか。さらには、原子核を構成する陽子が電子の質量の1800倍あることや、光速の定数が一意的に成立するといった物理法則は、この世界の必然性を特徴づけているのだろうか。前者は進化の、後者は素粒子物理学の問いであり、いまだに未決の大問題である。

とはいえ、今述べられた問いは、人間の経験可能性に直接的に関与してはいない。八本指の経験や、素粒子の経験は、実体験と想像力の範囲を明らかに超えている。そのため、こうした理論経験科学とは異なる、人間の生活世界的な必然性（生活世界的アプリアリ）を捉えようとする哲学的動向が他方で生じることになる。しかし、このアプリアリといえ

ども、どの程度確定されうるものなのだろうか。そもそも人間にとって、一定の大気組成、一定の範囲内の大気圧や温度、湿度の存在が、生存および感覚可能性のための必須条件である。さらに、こうした環境条件が安定して整っている領域は、広大な宇宙内の例外中の例外であるにとどまらず、地球の表面積からいってもそう広くはない。大半を占める海洋はいまだ人間の生存地区ではない。物理学的、生物学的な可能性の制約は、どうあっても単純に外すわけにはいかず、これら制約が突如揺らげば、人間にとどまらず、多くの生体は一挙に別様の物理的、化学的プロセスに巻き込まれてしまう。さらに、これら生存の制約を前提したうえで、なお人間の経験可能性は、これまで蓄積されてきた文化や慣習という歴史的記憶に隣接する経験の枠組みに縛られている。こうした縛りが、人間の存在を「別様の仕方では存在できないもの」にしているのであろうか。一般的に言えば、こうした認識は、地球上でかろうじて生存している人間の限定的で、暫定的な在り方の現状肯定にすぎず、普遍妥当性には程遠いように思える。むしろ、生活世界的な意味でのアプリアの探求は、実はその経験の背後に多くの制約が隠されていることを発見する探求と表裏をなしていることが分かる。その場合、多くの制約にさらなる負荷をかけたり、それを解除したりすることが、人間存在をどのように変化させてしまうのかという問いが前景化してくる。アリストテレスの知の分類でいえば、哲学が目指すはずの普遍的な「観照知」という枠組みでの探求はなく、「別様の仕方では存在できるもの」を探求する「行為知」の探求へと力点が移動する。つまり、これまで一度も在ったことはないが、今後いつでも在りうる経験や行為の発見と、そこへと進むための手順や手がかりにかかわる規則性の解明が必要となる。それはアリストテレスにとっては、プラクシス（行為）やフロネーシス（実践知）といった「(倫理的) 行為の規則性」の哲学的炙り出しに他ならなかった。

ただし、ここにもすでに可能性を限定する制約がかけられている。アリストテレスは、プラクシスには「選択」と「思量」が伴うと述べている¹。結果としてある事態を実現するための行為には、何種類もの手順と、その手順に応じた実現可能性の度合いが存在する。それらの有効性をそのつど思量し、最善の手順を選択するのが行為の積極的特性である。それに対してテオリアには、真か偽かという二項対立しかなく、手順や有効性の度合いを吟味する基準がそもそも存在しない。つまり真理には選択も、手順の思量も関係しない。テオリアとしての真理の論証は、何を生み出すのでもなく、それを単にあるがままに見ることを要求する。テオリアの対象があるときは真であり、またあるときには偽となることがないのに対して、プラクシスの対象は、選択された手順に応じて、最善の帰結として生みだされることもあれば、遠回りをしているうちに目指された対象それ自身に変化してしまったり、場合によっては失敗したりすることもある。ここまでは行為の性格をうまく言い当てている。

しかし、彼が「選択された事柄とは、あらかじめ思量された事柄」であり、「ひとが選択するのはおよそ自分自身によってなされうるとされる事柄に他ならない」と述べるさい²、すでに行為の可能性に制約がかけられている。つまり、おのずから行われる行為（随意的行為）は、外部からの強制であってはならないため、理性的熟慮がまず初めに必要となる。

¹ アリストテレス:『ニコマコス倫理学』(高田三郎訳、岩波書店、1971)、90頁以下参照。

² アリストテレス:前掲書、94頁以下。

その熟慮に基づいて自ら開始する動作のみが行為の名に値するのだ。その意味で実践知は、常に理性知に誘導されている。そのため選択とは、自らの力の範囲内にあるものについてのみ行われ、その範囲はすでに理性によって確定されている。したがって例えば「不死」という不可能なものを選択はありえず、それは単なる願望の対象にすぎないと言われる³。願望それ自体は行為ではない。ここでは、「別様の仕方では存在できるもの」としての行為の探求が、あらかじめ確定された「別様の仕方では存在しえないもの」の枠内に制約されている。不死は、理性知が明確に確定できる不可能という仕方では存在しえないものである。したがって、それに対する行為も不可能となる。

とはいえ、テオリアを通じて行われる不可能性の確定は、それほど自明で、必然的なものなのであろうか。確かに現代においても人間の「不死」は、不可能な出来事として厳として存在している。とはいえ、有機体としての生命の進化史を振り返ってみると、死というのは、真核生物がある段階から取り入れた、生存可能性のより一層の持続を見越したプログラム的一种である可能性が高い。つまり生命のある一群は有史以前に、死をみずから選択したのである。それに対して大腸菌などの真正細菌は、いまだに老化を経る死を経験することができない。このように死がひとつの生命の選択であり、それ以後、経験可能性の境界それ自体に変化や拡張が及んだとすれば、逆になぜ不死は今後選択できないのであろうか。不死を願望としてではなく、行為として実行することは、その実現の成否にかかわらず、可能性の動揺と拡張の手がかりとなる。

深度 200 メートル以下までの素潜りや、酸素供給なしで 8000 メートル級の登山を行うことは、人間には不可能であると言われ続けてきた。ギリシャのオリュポスの山頂に神々が座していたのも、人間には到達不可能な領域を画定する理知的人間の規約である。しかし他方人間は、繰り返しその境界を踏み越え、別様な次元の経験へと踏み出してきた。一度踏み越えが行われれば、それによって人間の経験可能性そのものが別様になり、他の多くの参入を促すことで、それ自体が自明な新たな経験可能性となる。とはいえ、踏み越えそのものは、当人にとってですら、それが踏み越えになっているのかどうかすら分からない領域への挑戦である。それは大半の人間から見れば狂気の沙汰であり、半ば狂人や超人へと自ら成りゆくことである。ここ一二世紀の間で、ニーチェが思想的展開としてこの方向性をどこまでも進めようと試み、思想的展開だけではなく、制作プロセスとしてもこの方向性へと探求を駆動させたのが、荒川修作であった。以下では、精神的、身体的な無数の人間的制約を揺るがすような環境設定を現に制作してしまうことで、人間の可能性に焦点を当てようとした荒川の試みについて、特に身体経験の拡張を起点として展開する。

1. 人間の可能性——有機体 - 人間

ギンズ/アラカワが導入した基本タームである「有機体—人間(organism that persons)」という概念は、既存の人間性からの解放と同時に、生命の可能性の拡張を狙った戦略的概念であり、人間とその身体の新たな組織化をターゲットとしている。普段私たちは、「人間」という語を聞いただけで、その語に含まれる意味と、その曖昧な裾野に含まれるものまで

³ 同上。

を暗黙的に了解してしまう。それは例えば、霊長類とのかかわりであったり、言語や二足歩行、道具の使用や文化的な社会共同体をもつといった人間の特性についてであったりするだろう。そこには、言語化されない漠然としたイメージも伴っている。そしてこうした了解こそが、人間とその可能性そのものの探求の端的な障害になっているとすれば、手っ取り早いのは、とにかく既存の「人間」という語を捨てて別のものに置き換えてしまうことである。そして、それ自体ではほとんど意味の分からない「有機体－人間」という語を主語にして、人間として理解されているものについて改めて語ってみるのである。

彼らが、この概念とともに狙っているのは、人間性からの解放とはいえ、フランケンシュタインのように物理的に身体を作り変え、不死の身体を手にする超人間主義ではない⁴。シェーラーが描くフランケンシュタインは、自らの身の上に苦悩し、ある意味、人間以上に人間的であり、人間を超えられなかったからこそその悲劇である。それに対して、そもそもギンズ/アラカワが見抜いている人間身体の本質的特性は、その物理的、生物学的、情動的、現象学的特性によって限定されてはいない。むしろこれらの否定形を越えて見出されるものこそ、私たちの運命でさえも反転させる「建築的身体」と呼ばれる。誰も見たことのない新たな生命へと向けた彼らの試みは、この「建築的身体」とともに始まる。ヒトはいつから人間になったのか？これは、系統発生的な進化の問題であると同時に、個体発生的な発達の問題でもある。ヒトは人間になるとあらかじめ教えられて人間になったのではない。そのための人間マニュアルも存在しない。ヒトはいつからか、みずから人間であると断言することで人間になり⁵、人間ではないと言われなかったために過剰に語り続ける存在になってしまった⁶。ギンズ/荒川が述べるように、「すべての有機体－人間が、みずから人間に作り上げることに成功するわけではない」⁷。人間になるというのがひとつの動的プロセスであるとすれば、そこには失敗可能性が同時に含まれている。つまり、人間になれない、成りきれないモノたちが歴史上は膨大に存在してきたことになり、今後も存在することになる。にもかかわらず、すでに人間であるものは、否応なく人間になったものたちである。というのも、一度人間になったものたちは、自力で人間以外のものになるための可能性を見出せないからである。おそらくこの否応のなさ、人間であることをひとつの選択肢として所有していない、強制された生命の不自由である。彼らの「天命反転(reversible destiny)」プロジェクトは、人間が人間であることによって知らずに設定してしまった、この緊張状態の解除を行い、さらには生命拡張のリスタートを行うことである。

そもそも「人間である」ということは、世界とのかかわり方が、ダニやアリとは異なり、人間的に組織化されているということである。目の前にペンがある。ペンをペンとして用いるのは人間くらいである。ペンを使う犬や豚はいない。ということは、ペンとのかかわりは、人間だけが組織化する世界とのかかわり方である。ギンズ/荒川の言葉では、「有機

⁴ 『建築する身体』のドイツ語版におけるダグマー・ブフバルトの序文「“不死”へのルート？」参照。 Madeline Gins und Arakawa: *Niemals sterben! Architektur gegen den Tod*, Jovis; Auflage: 1, 2008.

⁵ Foucault, M.(1966) *Les mots et les choses : une archéologie des sciences humaines*. Paris, Gallimard.

⁶ Lacan, J. (1966) *Écrits*. Paris, Éditions du Seuil, c1966.

⁷ Gins, M.& Arakawa, S.(2006) *Making Dying Illegal*. Roof Books, New York, p.212.

体ーバイゾン」には、溺れた仲間を助けだすためのロープも携帯電話もない⁸。しかしでは、もしこの人間という同一性が解除されたとき、私たちはどのようにペンにかかわればよいのか。そもそもペンをもつという行為じたいが、あまりにも人間的である。そこで例えば、本能に従う獣のようにペンを壁に叩きつけてみる。あるいは、ペンなど知らないふりをして無視し、素通りする。たとえこうした行為を選択したとしても、過度に人間的なイメージを用いた対応になっている。とすれば私たちは、ペンを前にして当惑するしかない。つまり、何をすれば人間性から解放されることになるのかが一義的に決まらず、私たちは行為不可能状態に陥る。だがしかし、この「躊躇する」⁹状況に身をおくことが「有機体ー人間」を感じ取るための第一歩となる。ここでは単なる思考実験が要求されているのではない。そうではなく、人間ではないものとなってペンに触れる経験を形成する場所を現に指定し、デザインし、現実化することが要求されている。そうしたデザインは、「新たな生命の／にとっての建築」となり、みずからが「建築する身体」となるための創造的実験となる。人間はもはや純粋な有機体へと戻ることはできない。それゆえ、「建築的環境」のなかで生命は、「人間」から「有機体」へ、もしくは「有機体」から「人間」へと繰り返し重心をズラし、揺れつづける。ギンズ/荒川が用いる用語に、「organism that person」や「organisms that person」、「organism that persons」といった複数形のズレが含まれるのも、おそらくこれに関係している¹⁰。この「一時性」に身を置くことが、新たな生命の秩序が形成される分岐点になると同時に、荒川プロジェクトの展開点のひとつとなる。以下では、この有機体-人間の可能性を、二つのアスペクトから考察する。

2. 重力とランディング・サイト

「有機体ー人間」にとって重力とは、その身体がもつ重みであり、歩行や疾走、水泳といった様々な行為を調整するための重要な手がかりである。人間であれ、どんな動物であれ、地上で暮らす限り、重力とは本来、逃れることのできない環境条件でもある。移動する手段をもたない植物であっても、おのずと光に向かって身体を立ち上げている。しかし、この身体の立ち上げは、植物と動物には埋めがたいほどの差異がある。というのも重力は、内骨格をもつ動物にとっては、多彩な身体運動の展開を可能にし、かつ世界のどこに、その身体が位置しているのかを内的に感じ取る手がかりにもなるからである。この点をさらに詳述してみる。普通、私たちが路上で歩行している場合、身体の重さは私たちの生きた経験のうちに現れてはこない。歩くたびに身体の重さが気になっていけば、それはすでに何らかの病理的徴候である。自分の身体ばかりに注意が向く野生動物は、生存闘争を生き抜くことはほとんど困難である。それゆえ、身体のこの「現れなさ」は、身体の優れた特性のひとつであることが分かる。

【テーゼ①】身体は、それが自在に動いている限り、ほとんど透明に作動する。

⁸ Gins, M.& Arakawa, S.(2006), p.159f..

⁹ Gins, M. & Arakawa, S.(2002) *Architectural Body*. The University of Alabama Press, Tuscaloosa, Alabama, p.82.

¹⁰ Gins, M.& Arakawa, S.(2006).

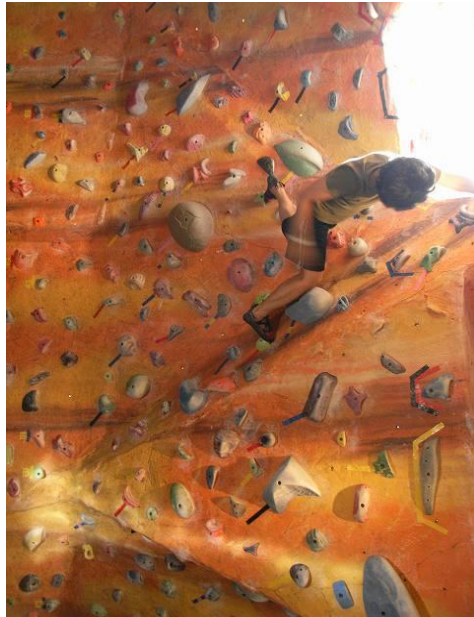
例えば、発熱による身体の不調や、逆立ちをして歩くことを考えてみればよい。そのような非日常的場面でこそ、身体は固有の重みをもつものとして、あるときには、不気味なものとして、立ち上がってくる。この「身体であること」に不可欠な、固有な物性の感じ取りは、透明—不透明という度合いの中を揺れ動いている。実際に 500g のペットボトルを手に取り、その重さを、自分の腕の重さと比較してみる。右手で左腕をもちながら、その右手にペットボトルと同等の重さを感じるまで左腕の力を抜いていく。すると、すでにこれは過度に難しい課題であることが分かる。というのも、左腕の力を抜き、緊張を弱めようとする事自体が身体の高め、重さの感覚がすぐにブレてしまうからである。多くの実践的場面では、力を抜くことが、力を入れること以上に困難であることはよくある。一度入った緊張は、意識の制御とは異なる仕方で身体を組織化してしまう。また、身体のだるさ（不調）に強弱の度合いがあるように、重力の中を動く身体にも、それとのかかわり方の差異が存在する。例えば、岩壁をクライミングしてみたり、砂利道のスロープを駆け上がったたりする場合、身体と「大地—環境」とのかかわり方は、岩をつかんで、身体を押し上げたり、砂利を蹴って前に進んだりするさいに、身体の高さの現れ方の差異とともに変化する。大地は、いつも水平である必要はなく、様々な傾斜をもち、様々な組成の物質からなる。しかもこの傾斜は、単なる視覚化された空間に配置される形態とは異なる。それは、運動する身体との摩擦や物性の違いに相応して、さらには重力の感じ取りに相応して経験される。通常であれば、傾斜が 45 度を越えた辺りから、それはもはや大地ではなく、壁面に変化する。なぜそうになってしまうのか。端的に言えば、その傾斜に対応するための身体能力がほとんど形成されていないからである。つまりそこでは、単なる路上での歩行とは異なり、逃れることのできない身体の高さが出現し、身体の高さが破られるのである。身体は、自在な動きを止めて、物質の固まりに近づいていく。このことから、次のテーゼが導き出される。

【テーゼ②】身体は、重力とのかかわりのモードが変化する中で、行為によって対応可能な環境をそのつど特定している。

例えば、植物の蔦や、昆虫、爬虫類の多くにとって、45 度以上の傾斜は、たとえそれが 90 度を越えたとしても、いまだに大地の延長上にあるように見える。天井に張りついているクモやイモリを思い起こせばよい。彼らにとって天井と壁面、大地の違いはどのように現れているのか。この問いが示しているのは、「壁面」や「天井」という言語は、世界に対する身体的な組織化能力が、圧倒的に不足しているものにとっての名称に他ならないということである。それゆえ、「有機体—人間」にとっての大地—環境とは、特定の重力の変化の範囲内でのみ成立する環境、つまり、当初から一定の制約をかけられた環境であることが明らかになる。とはいえこのことは、消極的な意味をもつだけでなく、むしろ【テーゼ②】の展開を保証している。つまり、

【テーゼ②α】身体と重力とのかかわりの新たな発見が、対応可能な環境の拡張に繋がる。

この展開されたテーゼ② α は、有機体—人間が見過ごしている世界の豊かさを、重力を手がかりにして見出すための発見法を意味する。通常、世界の特性には、以下のような「大地—環境」の配置の細目が含まれている。それが腕や足のリーチングの範囲内にあるか、その外にあるか、体軀をもたせかけることができるか、四肢の重みに耐える強度をもつか、足の踏み込みに耐える強度をもつか、横たわることができるか、移動することができるか等々。これらはすべて重力とのかかわりの中で発見される「有機体—人間」の世界の配置の細目である。しかし、クモの場合では、世界の配置の仕方はこれとは全く異なるはずである。彼らにとっては例えば、身体と大地との間の粘着性がどれほど維持されているか、そのための湿度や気温は最適か、移動する際に手足は何本まで壁面から離すことができるか、落下の際にその衝撃に耐えるだけの身体の軽さや敏捷性が確保されているか、どの位置に糸を張り出せば空中での身体の安定を維持することができるか、といった細目が前面に出てくるはずである。おそらく、こうした環境と、人間の生きる環境との接点はごく僅かである。図①を見てほしい。この人間が生きている世界とのかかわり、重力とのかかわりはどのようなものか、感じ取れるだろうか。どのような身体の重さをもちながら、どこへと行こうとしているのか。これは、従来の重力のかかわり方から距離を取り、人間の可能性の枠組みを拡張するためのエクササイズの一つである。



重力とのかかわり【図①】

ギンズ/荒川にとって「世界がどのように分配されているのか」は、どのような「ランディング・サイト」が実行されているのかに依存している。ランディング・サイトは、それが何であるのかを認識するのに先立って、身体の間（サイト）を繰り返し組織化すること

を意味する¹¹。それはまた、世界へと降り立つことで、身体が、触れながら位置を占める世界のテクスチャーを絶え間なく更新することでもある。ギンズ/荒川は述べている。「人間の行為は場所の属性に依存しており、またほとんどが場所化のプロセスもしくは手続きによって、おのずと配置されている。環境の編成は止むことがなく、眠っているときでさえつづいている。この編成の過程で生じたものは、なんであれ、ランディング・サイトとみなされるべきである」¹²。このランディング・サイトを考慮することによって、以下のテーゼが導かれる。

【テーゼ③】世界の配置を決定するランディング・サイトは、身体が重力を克服する段階に応じて、みずからの分散の範囲を変える。

単に路上を歩行しているような場合、世界の現れは顔の高さを中心に左右上下にほぼ均等に配分されている。前方、前方のちょっと先、前方のもっと先、前方の左上、前方の右下というように、世界の配置が与えられている。しかし例えば仮に、50kgほどの砂袋を背負って歩行する場合、世界の配置の仕方は一変する。まなざしは、中空から眼下の路上に向けられ、5m先を見渡すのにも困難を感じる。身体の緊張度や呼吸のリズムが変化し、周囲の音の聞こえ方も変わってしまう。このように、身体にどのような負荷がかかっているかに応じて、世界を分配するランディングのモードも変化する。ギンズ/荒川の言葉で言えば、「身体が自らを支える方法」は、同時に世界を支える方法でもある。

「身体がみずからを支える方法、身体がみずからを多くのスケールの異なる行為で支える方法、身体が世界を支える方法、これらは累積的であり、蓄積する。経験してきたすべての支え、あなたの、あなたによるすべての支え、それらはあなたがあなた自身を支えることのなかで、あるいはそれを通じて動いていき、しかもあなたが何かをとらえるさいの一部でもある」¹³。

深海、大空、宇宙といった空間性は、いまだ有機体—人間が活用できていない空間性である。さらには、中枢神経系の障害者や脳性麻痺の子供たちが、意図せず経験している世界の致命的な複雑さも、私たちは経験できていないし、活用できていない。というのも、そうした世界に対応するには、身体が自らを支える方法それ自身が、全く別様に変化してしまうための見通しを獲得する必要があるからである。ギンズ/荒川の著書『死ぬのは法律違反です (Making Dying Illegal)』(2006)に挿入されている「最大の社会的具体化／座談の格子 (MAXIMAL SOCIAL EMBEDDING / CONVERSATIONAL LATTICE)」(図②)では、人々が様々な位置に腰を下ろしながら会話が行われている。会話が行われるためには、どこかで身体が支えられている必要がある。歩行しながらの会話や立ち話であっても、身体

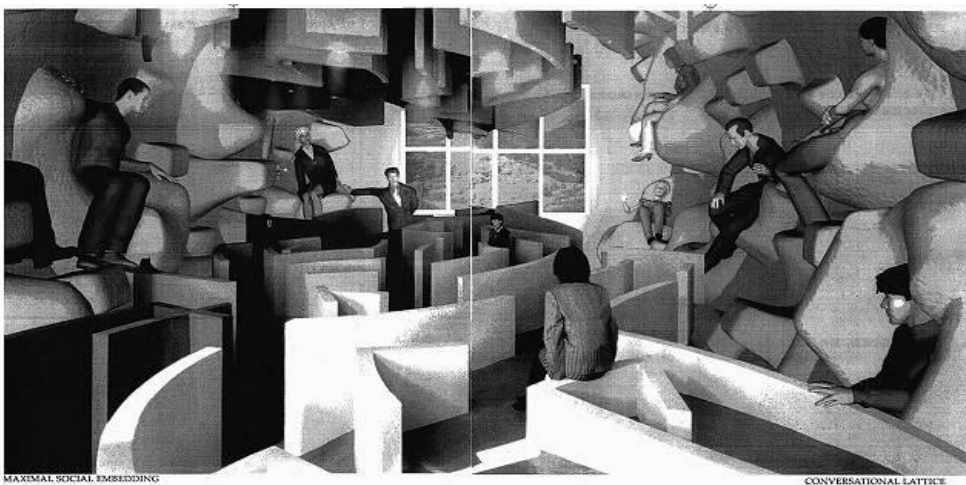
¹¹ ここでは、知覚のランディング・サイト、イメージのランディング・サイト、ランディング・サイト、の次元化の複雑な絡み合いが問題になるが、その詳細はここでは論じない。

¹² Gins, M. & Arakawa, S.(2002), p.7.

¹³ Gins, M. & Arakawa, S.(2002), p.83.

を支えている環境の特定がすでに行われている。にもかかわらず、ギンズ/荒川が設定する建築的環境では、その支え方の何かがおかしいと感じられる。その理由の一つは、この和やかな雰囲気の中で会話をする人々が、どのような身体能力をもっているのか、どのような重力場の中で暮らしているのかが、さっぱり分からないことにある。

ギンズ/荒川の構想では、建築物で暮らす有機体-人間それ自身が、建築的身体としてその建築物に組み込まれていなければならない。建築物が住むものを選定し、選定されたものが建築物を次の建築の構想へと展開させる。このことの連続である。人がそこで暮らす限り、既存の人間であり続けられる保証が繰り返し失われるような建築的環境を設定すること、それが荒川/ギンズの実験的試みの醍醐味である。実際の作品として、日本の岡山県の奈義町現代美術館にある「遍在する場・奈義の龍安寺・建築する身体 (Ubiquitous Site・Ryouan-ji of NAGI・Architectural Body)」は、そうした重力の度合いを変えるための絶好の実験場の一つとなっている (図③)。



【図②】 最大の社会的具体化／座談の格子



【図③】 遍在する場・奈義の龍安寺・建築する身体

3. 大気とクリービング

胎児は胎内では肺呼吸をしていない。母親の胎盤からくる血流を通じて酸素を体中に循環させているからである。それゆえ胎児は、産み落とされた瞬間から肺呼吸を開始せねばならない。初めて肺呼吸を行ったとき、何が起きているのか。誰もがその瞬間を経験してきたのに、その記憶は残ることがない。とはいえこの時点から人間は、「大気」との関わりを欠くことができない。たとえ水中に潜ったとしても、肺の中には幾分か酸素が常に残っている。大気は身体の外部にも内部にも浸透している。ということは、私たちは呼吸の獲得によって「大気的外部」が、何を意味するのかが分からなくなる世界を生きることになる。大気は、本やコップのように知覚される対象ではない。にもかかわらず、私たちはそれを通じてのみ、気温や湿度の変化、空気の流れを察知する。声を出したり、聞くことができるのも、大気のおかげであり、さらには大気を伝わる声色の変化から、人々の感情を察知したりもする。大部分の感覚の成立には大気が必要不可欠である。

【テーゼ①】 有機体と大気との関わりは呼吸を通じて突如形成され、それ以後、大気的外部を経験することがほとんど困難になる。

呼吸は、呼気と吸気が繰り返される波のようなリズムからなる。ただし、呼気と吸気が入れ替わるその一瞬にだけ、大気との関わりに「切れ目」が生まれる。つまりその瞬間、大気との関わりは切断される。そしてすぐに改めて回復される。仮に呼吸が回復されない場合、身体は硬直し、生命の断念に近づくか、もしくは、呼吸とは別のことが実行されている（驚く、身構える、潜る等々）。ギンズ/荒川が用いる「クリービング（切り閉じ）」¹⁴という概念は、こうした経験の断片化の働きを意味している。ただしそれは、単に切断するだけではなく、同時に次の経験の結合、再組織化することに貢献する行為の総称である。呼吸は典型的に、大気を「切り閉じる」ことで、大気との関わりを繰り返し更新している。

【テーゼ②】 呼吸は、クリービングを通じて、大気を断片化すると同時に、それとの関わりを再組織化する。

吐き出された大気は、分散し、発散し、混合しながら、空間を充満する。莫大な分子の集合である大気は、固体的な形態をもつことがない。それは一切のものの内側や裏側、襞の間に入り込み、次に切り閉じられる瞬間を待ち望んでいる。とはいえ逆に、大気という存在から見れば、その中で行為する「有機体一人間」は、激しく動く胃の中で消化されるのを待つ食物のような確率的存在にすぎない。切り閉じているのは、呼吸なのか、大気なのか。大気の中で生きる有機体のどんな行為であれ、大気を流動させ、切断する¹⁵。そうした切り閉じの終わりのない連鎖として、生命のダイナミズムが理解されるとき、それが「バイオスクリーヴ」と呼ばれる¹⁶。バイオスフィア（生命圏）は、どこまでも観察者が

¹⁴ Gins, M. & Arakawa, S.(2002), p.48.

¹⁵ 「生命位相学的レポート#1A (Biotopological Report #1A)」参照。Gins, M.& Arakawa,

¹⁶ Gins, M. & Arakawa, S.(2002), p.48.

特定する固定化された生態の場である。それに対してバイオスクリーヴは、切り閉じの行為の連鎖からのみ現れてくる生命の力動と相応する環境である。それは、切り閉じによる膨大な断片の集積であると同時に、緊密に協調する集合でもある。例えば、大気分子はそれぞれがランダムに動いているにもかかわらず、決して真空状態を作り出ししたりはしない。まるで分子同士が互いに配慮するように、お互いがお互いの場所を埋め合わせる。ギンズ/荒川は述べる。「わずか一つの元素（炭素であれ酸素であれ）、あるいは分子の形成の逸脱があれば、大規模な地殻変動をもちださなくとも、バイオスクリーヴが消滅し、数千年の場所を占めつつ向かう不確かな構築に突然の終焉がやってくる。細かくかつ巧みに出来事一組織をバイオスクリーヴとして捉えるなら、例えば主観、客観の区分のような、切断されて干上がった分離は、避けるべきものとなる」¹⁷。バイオスクリーヴには、たった一つの分子の挙動が、世界の配置を変化させてしまうような不確かさが含まれている。人間が死を避けることができないのも、有機体一人間が利用しているバイオスクリーヴが余りに脆弱だからである¹⁸。それゆえ彼らの建築作品は、この不十分なバイオスクリーヴに、十分に配慮された建築的手続きを埋め込むことで成立している。例えば「三鷹天命反転住宅」には、そこで暮らすための使用マニュアルがあり、その一つに、「部屋の内部と外部で切り閉じられる大気との出会いと別れを大切にしてください」という指示がある¹⁹。共同体の構成には、お互いがお互いを配慮することが不可欠である。しかしこの「配慮」のやり方が私たちには不足している。例えば、私たち自身は、60兆個の細胞の集積であるが、それぞれが協調して有機体を構成するように、共同体を構成するには何が必要なのか。さらに、モル数という莫大な大気分子が、意図することなく対流を作り、風を産み出すように共同体を構成するには何が必要なのか。彼らの建築物には、配慮という経験を、これまでの人間の経験の延長上ではなく、バイオスクリーヴとともに何重にも深化させるための手がかりが溢れている。

【テーゼ③】大気とのかかわりの発見は、共同体、有機体、細胞、分子といった様々なスケールを横断するための身体経験を獲得する手がかりのひとつである。

おそらく、呼吸を通じた大気とのかかわりの再発見は、感覚の感度を変え、身体の組成さえも幾分か変化させてしまう。そのことは、ヨーガや瞑想の修行の最中で行われる、永遠に続くとも感じられる長く深い呼吸や、アスリートが身体運動の準備態勢のために行う細く、小刻みな呼吸、さらには登山家が標高5000m以上の高地で、口内で大気を暖めながら、スープを飲むように行う呼吸が、それとして示唆している。ギンズ/荒川が踏み込もうとしている身体の別様な覚醒は、実は私たちの身近な身体行為の枠組みを拡張することから始まるのである。

¹⁷ *ibid.*

¹⁸ 「不十分な手続きを踏んだバイオスクリーヴの仮説 (Insufficiently Procedural Bioscleave Hypothesis)」を参照。Gins, M. & Arakawa, S.(2002), p.96.

¹⁹ Gins, M.& Arakawa, S.(2006), p199.